

船舶事故等調査報告書

平成26年1月30日
運輸安全委員会（海事専門部会）議決

事故等番号	2012広第184号
事故等種類	火災
発生日時	平成24年9月26日 09時30分ごろ
発生場所	愛媛県上島町豊島漁港 上島町所在の豊島二等三角点から真方位289° 350m付近 (概位 北緯34° 13.9′ 東経133° 15.4′)
事故等調査の経過	平成24年10月5日、本事故の調査を担当する主管調査官（広島事務所）を指名した。 原因関係者から意見聴取を行った。
事実情報	
船種船名、総トン数	交通船 ^{オーエス} OS7号、10トン
船舶番号、船舶所有者等	273-3285 広島、岡田石材株式会社
乗組員等に関する情報	船長、二級小型船舶操縦士・特殊小型船舶操縦士・特定
死傷者等	なし
損傷	機関室内電路の焼損
事故等の経過	本船は、豊島漁港内の棧橋に係留中、隣接して係留中の交通船OS5号（以下「僚船」という。）の主機が始動できなかったため、本船のバッテリーから僚船に給電することとし、船長及び後任の船長（以下「後任船長」という。）が両舷主機の始動を行い、右舷主機用バッテリーからブースターケーブルを介して僚船の主機用セルモーターを始動していたところ、平成24年9月26日09時30分ごろ、電路の配線被覆が焼損して機関室から黒煙が吹き出し、火災が発生した。 本船は、船長が、両舷主機を停止し、船内の持運び式粉末消火器1本及び付近のコミュニティセンターから借用した持運び式粉末消火器3本で消火作業を続けたところ、09時45分ごろ鎮火した。
気象・海象	気象：天気 曇り、風向 北、風力 1 海象：海上 平穏
その他の事項	本船は、機関室中央両舷に主機を2基装備し、船内給電を兼ねた主機始動用電源として機関室後方の両舷にそれぞれ直流12Vのバッテリーを2個備え、いずれも直列配線して24Vとして使用していた。 僚船は、機関室中央に主機を1基装備し、船内給電を兼ねた主機始動用電源として機関室後方に直流12Vのバッテリーを2個備え、直列配線して24Vとして使用しており、平成23年6月にバッテリーが新替えされていた。 僚船は、本事故前日、後任船長が、主機の試運転を行ったが、異状は認められなかった。 本船の機関室内に敷設された電路は、主にキャブタイヤコードが使

	<p>用されていた。</p> <p>船長は、僚船の主機の始動を試みたが、クランク軸が回転するまでには至らず、本船の機関室から黒煙が発生するとともに、何かが破裂するような異音を聞いた。</p> <p>本船は、機関室天井に吸排気ファンが右舷側に2個及び左舷側に3個配置されていたものの、本事故当時には、いずれも停止していた。</p> <p>本船は、本事故後、被害状況を精査したところ、次のことが判明した。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 機関室内の電路の配線被覆が焼損しており、バッテリーのケーシングが破裂し、バッテリー液注入用プラグが一部吹き飛んでいた。 (2) 機関室内壁面は、すすの付着によって汚損していたが、焼損には至らなかった。 (3) 機関室外の電気装置及び電路に損傷はなかった。 (4) 機関室内には、油類が漏えいした痕跡はなかった。 (5) 自動拡散型粉末消火器は、機関室天井に1個設置されており、自動的に消火剤が放射されていた。 <p>僚船は、本事故後に整備業者が点検したところ、主機に異状は認められなかったが、バッテリーが充電不能であることが判明し、新替えされた。</p> <p>船長は、本事故当時、退職に伴う業務引継ぎを兼ね、後任船長と共に本船に乗船して作業に当たっていた。</p>
<p>分析</p> <p>乗組員等の関与 船体・機関等の関与 気象・海象の関与 判明した事項の解析</p>	<p>不明 あり なし</p> <p>本船は、豊島漁港に係留中、本船のバッテリーを電源として僚船のバッテリーにブースターケーブルで接続して僚船の主機の始動操作を開始したところ、本船のバッテリー及び電気配線付近から出火したことから、機関室内の配線被覆に延焼した可能性があると考えられるが、出火した要因を明らかにすることはできなかった。</p>
<p>原因</p>	<p>本事故は、本船が、豊島漁港に係留中、本船のバッテリーを電源として僚船のバッテリーにブースターケーブルで接続して僚船の主機の始動操作を開始したところ、本船のバッテリー及び電気配線付近から出火したため、機関室内の配線被覆に延焼したことにより発生した可能性があると考えられる。</p>
<p>参考</p>	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バッテリー及び電路は、触手するなどし、通電中における発熱の有無を十分に点検すること。